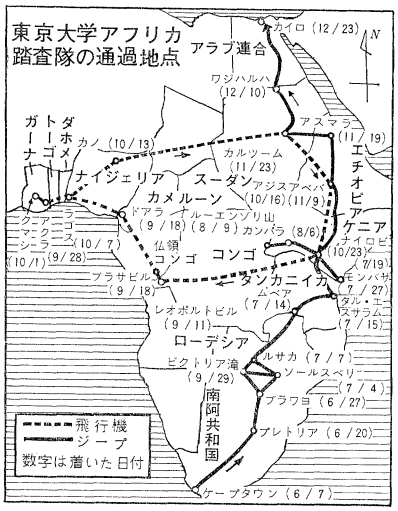
アフリカ大陸を旅行して

鈴木博明



僕は，東京大学の運動部の学生を主体にしたアフリカ踏査隊に加わり，昨年5月より本年1月まで約8ヵ月，アフリカ旅行をしてきました。

資金を集めたり渡航手続きの問題等でこの計画の実現には多くの困難もあったが若さがこれを克服したといえる。

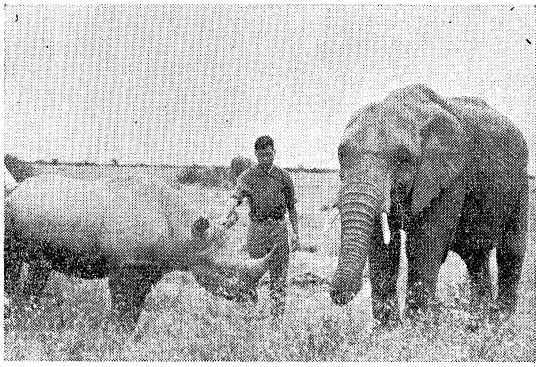
僕たちの旅行の目的は，日本にはまだ暗黒大陸としか一般には知られていないアフリカ大陸を，青年の目でとらえ，ひろく紹介しようということであり，隊員が，運動部のOBや現役からなっていたことで，スポーツなどを通じて，日本とアフリカの友好親善などに，役立てば幸いと考えたわけです。

実行にあたって僕たちは3台の国産ジープの貸与をうけ，可能な限り奥地へも入り込む計画をたてました。カイロでこの旅行を終ったある夜のこと，僕は，退屈まぎれに「ハタリ」(スワヒリ語で danger の意味) という映画を見に行きました。

観客は勇壮な猛獣狩りに，手に汗をにぎり，マサイ族のこっけいな歌と踊りのシーンには笑いころげているのです。アフリカ大陸の一部であるカイロですらこれです。遠く離れた日本の人たちが，アフリカを知らないのは無理もないと感じました。僕には，ウガンダのマッケレーレ大学で熱心に勉強をしていた，マサイ族のベン・カンタイ君を忘れることはできませんでした。またこんな大がかりなカファリ（スワヒリ語で journey の意味）をするのはアメリカのハリウッドからきた金持ちの連中だけです。今ではアフリカにいる猛獣は象にしろライオンにしろきびしく法律で保護されていて大枚を投じなければとても猛獣狩りなどできないのです。なにしろ猛獣はアフリカの重要な観光資源なのですから—…。アフリカの毒に染まった者は必ずアフリカに帰るといわれますが，いつしか僕もアフリカの魅力にとらえられ深くアフリカを愛する一人になっているのに気がついたのでした。「アフリカ」などというとまず，この計画だったら六人の隊員のうち半分生きて帰えれればましなほうだとか，まるで，出征兵士を送るかのようなせんべつの言葉を沢山いただいて昨年5月9日不安な気持で，神戸港を離れました。約1ヵ月の船旅で僕たちは南ア共和国のケープタウンに上陸しましたが，まず僕たちは，予想外の日本ブームに驚いてしまったのです。日本人はホワイトに属するという法律ができたことは聞いておりましたが，本当のところ僕などはジャンジャン差別待遇をうけて苦い思いでも味わってみたかったのです。

南アは，A・A グループや国連のみならず英本国からすらそのアパルトハイト政策に対し背を向けられているのですが，せっせと鉄鉱石やダイヤモンドを買ってくれる日本には唯一の味方だというような親近感を抱いています。ある黒人の政治指導者はこの点を痛烈に指摘して，僕も返答に窮したこともあります。西や東アフリカの黒人諸国に対する貿易はもちろんできませんが，かといって，いや南アに出ている自動車やトラジスターなどの輸出品もこれを黒人諸国に味方して，ボイコットして

ケニヤのマサイ族の子供たち



象，さいと遊ぶ筆者

しまうとなると大きな損失です。しかし，こんな中途半端なアフリカ政策がいつまでも続くと思ったら大間違いで日本の政治家たちの認識不足といわねばなりません。とにかく日本は南アのかけがえのないお得意さんであり，日本人である限り，大変歓待をうけるというわけです。もっとも，南アを訪問した体操チームや水泳チーム，それに南極観測の「宗谷」などがはたした親善の力も見逃すわけにはまいりません。僕たちのチームには，川上君という柔道の猛者がおりましたので彼はあっちの道場，こっちの道場といたるところ，ひっぱりまわされ，合気道をやる星野ドクターとふうふういっておりました。いまや世界は，アフリカにおいてすら柔道ブームなのです。

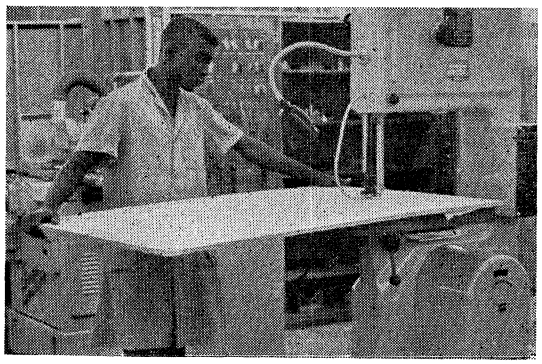
キンバレーで，白人相手に柔道をやったときのことです。僕は，柔道ができないので黙って見物していましたがしきりに袖をひっぱる奴がいますのでふり向きますと「こうして白人がポンポン投げられるのを見て痛快でたまらない」というのです。彼は支那人の医者でした。

南アからローデシアにかけては入植している白人も多く少しもアフリカだという気がしませんでしたが，タンガニィカに入り様相はガラリと変わりました。運転していても汗はふきでるように流れますし黒人以外はほとんどみかけなくなりました。買物をするにも，道をたずねるのにもスワヒリ語を使わなくてはなりません。ヤシやバナナがおい茂り熱帯にきたという感じがします。東アフリカ一帯は，どんな田舎に行ってもインド人が店をやっています。近年になって急速に入ってきた文明に土人たちが，目を白黒させているうちに商業権はみな，このインド人に握られてしまったのです。日本の商社なども，これらずる賢こいインド商人を相手にあきないをしなければならぬのですから，容易なものではありません。彼らは昨日だした注文を他のほうが安いからといって，今日キャンセルするくらいはあたり前に考えています。そのくせ粗悪品だったとか，何とかワイワイ，クレームがくるのです。ケニヤも来年中には独立するようですが，政治にしても商業権にしても彼らにぎゅうじられている限り，その未来には沢山の問題が残ると思います。ナイロビに入ったのは7月19日でしたが，これまでの息抜きの意味もあって，僕たちはキリマンジャロに登り，ふたたびタンガニィカにもどりました。キリマンジャロは，アフリカの数少ない観光ルートのひとつです。山麓のホテルで，いっさいをアレンジしてくれるので，女，子供も登れるが，一応6 000 m はある山なので高山病になったりしてそんなにやさしくはないようです。最高点のカイガー ウィルヘルム シュピィツェー タンガニィカ（戦前ドイツ領）には，鉄の箱の中にノートがおいてあり，登頂者はサインするようになってます。パラパラとめくってみましたが，さすがにここまできている日本人の名はここ二，三年のところにはみかけませんでした。おりてきたときモチャガ族のポーターたちが美しい花かずらを編んでくれました。何という花かは知りませんでしたが，キリマンジャロの 4 000 m ぐらいの所に咲いている白い花で，いまも枯れないで咲いており，僕の懐しいアフリカみやげのひとつです。ウガンダには，東アフリカ唯一の総合大学である，マッケレーレ大学があります。ナイロビへ戻ってから，今度はこのウガンダに車をすすめました。昔，ギリシャ時代のプトレミーの本に「ナイルの源である白銀の山」と書いてありますが，近世になり探険家たちはこのナイルの源を探し求めてアフリカの奥深くわけ入ったのです。この山を現地の土人たちは，ルーウェンゾリ（月の山）と呼びます。赤道直下にありながら，高い山なので天気がものすごく悪く，いつも霧のベールにつつまれています。キリマンジャロなどよりもずっと遅くスタンレーにより発見されました。僕たちはこのコンゴとウガンダの国境にあるルーウェンゾリに挑みました。山に入っている間中，雨が降ったり，赤道直下というのに雪が降ったり，大変幻想的でした。帰りには，川が増水し土人と力を合わせ木を切り倒して橋を架け山麓一帯にいる象とバッタリぶつかったりして，まさにスリルと冒険にあふれたサファリでした。もちろん，日本人では初めて世界でもあまり類のないルーウェンゾリ登頂をしてきました。そして，それにもまして山を通じて原地人たちと心から信じ合い助け合うことができたのが，僕たちにはこのうえなく尊く思われました。僕が一緒に頂上に登ったゼダキア君からは今もときどき手紙がきます。彼は英語なんか書けっこないので代書です。僕たちが，アフリカ旅行でめぐりあった一番よい男でした。8月の末，山からおりてきた僕たちは，カンパラでマッケレーレ大学の学生寮に滞在しました。学生気質などというのは世界どこでも同じです。アフリカの学生だってなんとか少ない労力で単位をとろうと努力しているのは僕らとちっとも変わりません。しかし，エリート中のエリートだけあり，とても優秀な学生たちです。あ

象の出現を予告する道路標識

る日，ゼミナールで日本についての講演をしたことがありました。多かれ少なかれ彼ら東アフリカの学生たちは大英帝国の絶対さについて教えこまれ信じているのですが，僕たちの乗ってきた車はもちろん，洋服だって時計だってカメラだって全部日本でできた物だしこんな大きなアフリカ旅行も僕たち日本の学生が独力で組識しうるものだと説明したら，いささかショックをうけた学生もいたようです。とにかく，エリートである限り，アフリカの学生の中にはどうしても消極的で生ぬるい所がでてきやすいのです。また，生まれてからこのかた英国の力を信じきっていたのがアジアにありながら現にこんなすばらしい工業力を示している日本を改めて見直したのだと思います。彼らには，そういう意味で良い刺激を与えました。当初のコンゴ横断計画は，コンゴの状勢がまだ回復せずおまけに雨季にぶっつかったりしましたのであきらめて 9 月 11 日，僕たちはナイロビより空路で西アフリカに向かいました。

西アフリカは白人の墓場といわれるだけあり，猛烈な暑さです。僕は西アフリカにきて西アフリカの黒人と東アフリカの黒人の間に非常な差異があるのに気がつきました。チョコレート色の東アフリカの黒人，スミみたいにまっくろな西アフリカの黒人と，肌の色はもちろん異なっていますが，どことなく陰気な東アフリカの黒人にくらべ西アフリカの黒人は陽気，おしゃれで，底抜けに明かるいのです。これは，きっと東アフリカの黒人たちがそれだけ苛酷な植民地政策をうけたためではないかと思います。アフリカといっても，東アフリカは，気候も比較的よいし，とにかくヨーロッパ人にとっては住みよい重要な植民地なのでした。コンゴ，カメルーン，トーゴ，ダホメ，ガーナ，ナイジェリアと 2 ヵ月半，飛行機を使って歩きました。コンゴのレオポルトビルは，おりから国連軍の進駐でホテルなどはとれないので，舎監のベルギー人宣教師にトランジスター ラジオ 1 台なりのワイロをとられロバニウム大学の寄宿舎に泊まりました。後にガーナのエンクルマ大学や，ナイジェリアのイバダン大学でもそうでしたが，美しい花の咲き乱れる学寮に全額を政府から支給されて，ノビノビと勉強している学生はうらやましいくらいです。工科大学といってもエンクルマ大学などは日本の工業高校程度の実施教育をしている程度です。とにかく電気ドリルや旋盤に取り組んでいる学生たちの姿は，将来のアフリカを背負ってたつ新興の意気に燃えている気がしました。10 月の末，ナイロビに帰ってからは，いよいよエチオピアへ抜ける悪路の突破です。沼地帯で，マラリヤ蚊に悩まされ何度も水につかっては，ウィンチでひき上げる作業を続けました。まる 1 日かかって 130 km しか進めない日もありましたが，アビシニアの高原に出たときは，これで助かったと体中の力が抜けてしまうほどでした。スーダンのタビア砂漠の旅もまた終生忘れ得ぬものです。カルツームからナイル河にそっていく日もいく日も砂漠の中を走ります。タイヤ全部が砂に埋まって，先に行ってしまった仲間の車がもどる間なんと心細い思をして待っていたことだろう。おまけに僕らの車のフロント シャフトがポキリと折れてしまったのだ。一時は車を捨てようとも思ったが溶接で応急手当をして旅を続けました。



ガーナ　エンクルマ大学学生の実習風景

12 月 23 日リープを出てから 26 000 km，遠くナイルの彼方にカイロの灯を望んだ夜は後から後から涙が流れてきて嬉しくてなりませんでした。長い苦しいアフリカ旅行だったけれどもとうとう僕たちはやりとげたのだと。

僕は，今度の旅行中，日本の商社や在外公館の人たちからいたるところで何しろ日本は東南アジアで手が一杯でアフリカまではというような意見をお聞きしました。しかし，アフリカの青年達の日本に対する期待が大きいのを知っているだけに僕は残念な気がしてなりません。碁でいう捨石でいいと思います。今は役立たなくても必ずおいておかなければならなかったという時がきます。1 年に 10 人でも 20 人でもよい，せいぜい留学生を招くくらいのお金が日本にないものでしょうか。

なるほど，僕たちの見てきたアフリカには貧乏，泥棒，不潔さなどいつ解決されるのかわからない問題が山とあります。しかし，けん命に製図板とにらめっこをしている学生や，力強く現地で働いているアフリカ人をみるにつけ，僕は，やはり，アフリカは未来の大陸だと感ぜざるを得ませんでした。アフリカは，将来国連での議席の多くを確保しうる大陸なのです。ひとつ，アフリカ大陸にも少し目をむけようではありませんか。最後にこの計画にあたって大変お世話になった，当時の工学部長である武藤先生と土木工学科の八十島先生に深く謝意を表する次第です。　（筆者・東京大学工学部　土木工学科四年）